

ひょうたん島日記

海洋調査船「弥生」竣工 ～東大大気海洋研～

大槌町にある東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターの海洋観測船「弥生」の竣工式と一般公開が、11月12日、大槌漁港でありました。震災で大きく変化した海洋の生態系や環境を調べます。大槌を母港とする「新青丸」に続く海洋調査船の竣工に、漁業の復興と交流人口の拡大が期待されています。

「弥生」(12トン)は全長17.5メートル、幅4.2メートル、最大速度は24.1ノット。20人乗りで、総工費は1億3000万円。船体は強化プラスチック製で、水温や塩分を自動的に観測する装置や、大型の機器を積み込む設備を備えています。沿岸で観測データを集め、生物や海水を採集し、分析します。

竣工式では、東大大気海洋研の新野宏所長が「大槌湾内にとどまらず、湾外でも調査し、環境がどのように回復しているかを調べたい」と述べまし



た。碓川豊町長は「町の産業の柱である漁業の復興に向けて意義がある。弥生は町の誇り、町の財産」とあいさつしました。

国際沿岸海洋研究センターには、震災前、先代の「弥生」に、小型の船を含めて4隻の調査船があり、すべて震災で流失しました。昨年夏までに、小型船3隻は復旧し、「弥生」の完成が待たれていました。

復興願って東京に集う ～ふるさと大槌会に100人～

「ふるさと大槌会」の今年の総会と交流会が11月16日、東京都内のホテルでありました。首都圏を中心に約450人いる会員のうち、100人を超える会員が参加しました。碓川豊町長が復興について報告し、質疑を交わした後、お互いに旧交を温めました。

ふるさと大槌会は首都圏在住者により1987(昭和62)年に発足しました。会員相互の親睦と、町の発展に寄与することを目的に、年1回の総会と交流会を開いています。役場に保管してあった会員名簿が震災で流失したために集め直し、450人の名簿を復元しました。

ふるさと大槌会は震災後、故郷を支援する活発な活動を続けています。今年は、震災時に、町民が撮影した写真を展示した「リメンバー大槌」を東京、大阪、盛岡などで開催し、反響を呼びました。また、復興支援基金をつくり、小中学校に約200



万円相当の学校備品などを寄付してきました。

会長の金崎雄三郎さん(69)は「会員に若い人たちが加わり、活動が積極的になってきました。故郷の早期復興が会員全員の願いです」と話しています。

毎年、参加している永野弘子さん(77)は「震災直後と比べると、皆さんの表情が明るくなりました。年1回、懐かしい人たちに会えるので楽しみにしています」と語ってくれました。

PHOTO まちかど



「沢山の道端のクリ木にクリの実がなっていました。沢山は果樹園が多く、自然豊かな場所です。震災後の復興事業によって、地域は大きく変わります。クリの木も伐採される予定です」【10月8日、伊藤陽子さん撮影】

総合政策課では読者の皆さまからのニュース提供をお待ちしています。町民の方々に広く知ってほしい出来事があれば、お知らせください。「PHOTO まちかど」への写真投稿も歓迎です。変容する町の姿、震災前から変わらない町の光景を写真で切り取り、お寄せください。また、広報誌への感想や提言を、お送りください。はがき、手紙の場合は、住所、氏名、連絡先(電話番号など)を明記のうえ、〒028-1192 大槌町上町1-3 大槌町役場総合政策課・広報誌担当へ。

☎ 総合政策課 企画調整班 TEL 0193-42-8724 E-mail : sougouseisaku@town.otsuchi.iwate.jp



「ハクチョウが越冬のために南下しています。大槌川の橋のたもとからコハクチョウ3羽を撮影しました。さらに南下しようとしているのか、エサを求めようとしているのか。優雅な姿が印象的です」【10月14日、三浦寧史さん撮影】

3年目の仮設 ～より良き暮らしのために～

被災者励ます岸和田だんじり ～和野の仮設団地～

大槌町の仮設住宅に住む被災者を励ましたいと、11月17日、大阪府岸和田市の岸和田だんじりが、和野の仮設住宅で、だんじりを披露しました。小春日和の中、子どもたちからお年寄りまでがだんじりを引き、勇壮なだんじりをちょっぴり体験しました。

岸和田市で市民有志による「絆だんじりプロジェクト」が結成され、だんじりを伴って被災地を訪れています。この日、大槌町の旧役場庁舎前で、だんじりを引き、震災の犠牲者を追悼。その後、和野地区の仮設住宅を訪れ、午前と午後の2回にわたって、住民がだんじりを引きました。

仮設住宅に住む関トシ子さん(64)は午前も午後も綱を引きました。「運動不足が解消されました。いい汗をかきました」。岸和田市に住むプロジェクト代表の梶野康博さん(57)は「皆さんに喜んでもらってうれしい。岸和田からきたかいがありました」と話しました。



町長随想

⑧ 今年の流行語

今年の流行語の候補に、国民的に話題となった「お・も・て・な・し」「今でしょ」「倍返し」「じゃええ」「じゃええ」などがノミネートされた。いずれもうなずくことができる流行語である。

東日本大震災津波から、12月5日で節目の千日。歳月が流れる中で、「二日も早く」が、復興に関する会議の挨拶や、被災者同士の会話で自然に使われている言葉である。

様々な場面で、多くの皆様から「復興がなかなか進まない」と、お叱りを受ける。目に見える形で工事が始まらないと、町民皆様の焦慮感が収まらない。そのような中、復興工事に関連した一体的業務の安全祈願祭が、11月に吉里吉里、浪板、安渡、赤浜、小枕・伸松地区で行われた。すでに6月に工事が始まっている町方地区に、これらの地区が加わることで、全町で工事が本格化することになる。

これから先、事業の許認可や土木技術職員の確保、土地の確保、業者の確保など、様々な課題が挙げられる。もう嘆いている暇がない。土地などの基盤整備のほか、医療、福祉、教育や産業の再生など、理屈抜きに進めなければならない。

誰も経験したことのない壊滅的な打撃を受け、その逆境からの再生に、町民の皆様始め多くの支援団体の皆様に、真剣に取り組んでいただいている。言葉では言い尽くせないほど感謝の気持ちである。来年は、午年である。「人間万事塞翁が馬」という、馬にちなんだ中国のことわざがある。人間の吉凶禍福は変転し、予測できない。人それぞれ何が福となるか安易にわからないが、「良かった良かった」が流行語になる日が一日も早く来ることを願う。

(碓川 豊)